

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」 (マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第34号

2019年10月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65  
日本聖公会管区事務所気付  
正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:篠田 茜

## 「ハレルヤ、主と共に行きましょう」

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋宏幸 (東京教区)

1998年12月、渋川良子執事が司祭に接手されて以来、20年という月日が経ちました。日本聖公会にとって歴史的な出来事であるとともに、神様の出来事とも言えましょう。そして、1999年1月6日顕現日、東京教区聖アンデレ主教座聖堂において、山野繁子執事、笹森田鶴執事が司祭に接手されました。その時のお二人の笑顔と、それに勝らず劣らずの竹田主教の満面の笑顔はいまだに鮮明に残っています。そこには、単に嬉しさだけではなく、大きな一歩、新たな始まりへの希望ともいうものを感じさせられました。

そして、昨年2018年12月1日、同じ聖アンデレ主教座聖堂において女性の司祭接手20年を感謝する聖餐式が捧げられました。それは、まさに「ユーカリスト」という名称に込められているとおり、感謝と賛美の捧げものでもありました。その聖餐式で説教をされた英国聖公会のテリー・ロビンソン司祭が力説されました「恐れるな」というメッセージ、そして引用された海岸で貝殻を集めていた子どもの話を伺いながら、ともすると旧態依然の姿や考え、慣習などから抜け出すこと、手放すこと等を恐れている自分というものをも顧みさせられました。

実際、イエス様ご自身何度も言われました。「恐れるな、恐れることはない、私がともにいるから！」と。同時に、この言葉には「恐れずに、新たな一歩を踏み出さない」というイエス様からの励まし的心も込められていると思えてなりません。

私たちは様々な違いや背景を持っています。しかし、神様から授けられている命に仕えることにおいては、仕え方の違いこそあれ一つのはずです。協働という言葉には、そのような意味合いが込められているのではないのでしょうか。古の時代に聖書を手掛けた人たちが神と名付けた命の源、命の働きの内在に在って、各々が違いを認め合いつつ、尚且つ賜物を捧げ合って仕えていく、ことに授けられた司祭職を通して仕えていく祝福が与えられた、そのことへの深い感謝と喜びをともにしたいと思えます。

扉は守りに入る時には閉ざすものでしょう。けれども派遣の唱和にありますように「ハレルヤ、主とともに行きましょう (主を愛し、主に仕えるために)」、言葉を足しますなら、



外へ向かって、私たちの周りにある殊に痛みや綻びに仕えるために外へ向かって歩み出す時、私たちは閉ざしてきた扉を開かねばなりません。しかも、思いを、力を、心を合わせ、一つにして！

「女性の司祭按手 20 年」とは、その時だけのお祝い事ではないはずです。そうではなく、思いを、力を、心を、賜物を捧げ合いながらさらなる新たな歩みへの出発の時でもあるはずですし、そうしなければならない時のはずです。「聖なる神よ、あなたは私たちを励まし揺り動かすために、またあなたが授けてくださる賜物を私たちの中で目覚めさせるために聖霊を送ってくださいます」ことを信じ、祈り続けたく思います。

## 聴く・話すワークからの気づき—管区ハラスメント防止・対策研修会 クララ 西原美香子（管区ハラスメント防止・対策担当者）

「話してくれてありがとう！」「聴いてくれてありがとう！」と、向かい合った教役者や信徒たちが、にこやかに挨拶。これは去る 3 月 21 日（木）～23 日（土）、東京の牛込聖公会聖バルナバ教会を会場に行った「ハラスメント防止・対策研修会」の一場面です。この研修会は、管区ハラスメント防止・対策担当者が主催し、管区の人権問題担当者・女性デスク・正義と平和委員会ジェンダープロジェクトと連携して開催しました。



この研修の目的は 4 つ。①ハラスメントの概念だけでなく、ワークショップをとおして体感的に学ぶ。②祈りやみ言葉の分かち合いをとおして、教会/キリスト者がこの問題にどのように取り組むか示唆を得る。③課題を共有し、対応にあたってより良い仕組みを構築する。④各教区での防止研修の展開を模索する。この目的の一つである体感的に学ぶワーク



金香百合さんによる研修

ショップを、HEAL ホリスティック教育実践研究所所長の金香百合さんをお願いしました。教会の内外の現場で起こる出来事に、常日頃心を痛めている参加者を元気にするためには、対人援助者の養成も行っておられる金さんのチカラを得たいと考えたからです。

ワークショップは、包括的（ホリスティック）に捉える視点の転換からスタートしました。ハラスメントは「暴力」です。暴力であるハラスメントが起きない、そして起こさせない教会・地域コミュニティ・社会をつくるためには、その要因を包括的にとらえることが必要。つまり、一つの出来事を、一面的にとらえて判断・対応するのではなく、全体のつながり・バランス・関係性を「包括的」にとらえることが大切であることを学び、社会の出来事は決して他人事ではなく自分自身につながっており、私たちは暴力の被害者にも加害者にも成りうるのだと気づかされました。金さんはまた、人が生きていくためには、身体の栄養と同様に心の栄養が必要であること、さらには事例を交えて、この栄養が不足すると、自分や人

に向けた暴力が起こると話してくださいました。

参加者たちは二人一組となって、「〇〇さんの心の栄養は足りてますか？」と問いかけ合いました。普段ならそんなストレートな質問に、容易く心の内を明かすことなどありませんが、この日ばかりは、誰もが正直に語る事ができたのです。ここに自分の名前を呼んでくれる人がいる。目を見て話を聴いてくれる人がいる。勇気を出して話したことに、「話してくれてありがとう」と言ってくれる人がいる。この体験が、それぞれの心の奥底にある凝り固まったものを解し、自分自身を見つめる機会を与えてくれたように思います。

ハラスメントという暴力を見抜き、それを解決していくために、私たちに必要な3つのチカラ。それは人間に興味をもって理解していこうとする「人間力」、社会が人間に与えている影響を理解し、人間が社会を変えていく「社会力」、話すべき時に話し、聴くべき時に聴くことをバランスよく行う「対話力」だと学びました。私たちの日常は、「聴く」「話す」の繰り返しです。じっくり聴くことから、ハラスメントという暴力を防ぐ一歩を進めたいと願います。



## 第27回聖公会「女性」フォーラムを終えて

マルタ 井田涼子（京都教区）



金子登美江さんの報告を聞く

第27回聖公会「女性」フォーラムが奈良基督教会を会場に2019年7月14日（日）、15日（月）に行われた。参加者は一部参加を含めて34名。今回のテーマは「手放す ゆだねる 受け入れる」。聖句はマルタとマリアの物語から「必要なことはただ一つだけである。」（ルカ 10:42）。開会礼拝はホールに椅子を丸く並べ、ベタニヤのマルタとマリアの家に皆で集まったイメージで中央の机を囲んだ。

日々の生活の中で、あれもこれもをと抱え込んでしまい、身動きできずにいるわたしたちの有り様—それはイエス一行を招き入れ、精一杯のもてなしをしようと動きまわるマルタの姿にも見える。その時、妹のマリアはイエスの足元に座り、み言葉に耳を傾けていた。マルタは焦る気持ちを抑えられずに、マリアは「わたしだけにもてなしをさせて」と「手伝うように言ってください」とイエスに訴えた。

「必要なことはただ一つ、それを自分からも他人からも取り上げてはいけない」。多くのことを抱え、不自由になっているマルタの心を開放された。今回のフォーラムの間、この言葉が響いていた気がする。井戸端会議を兼ねたバイブルシェアリングの中で、参加者が感じたことを、聖書の中の登場人物になりきって日記を書いてみた。



会場に飾られた植物たち



二日目は第 63 回国連女性の地位委員会に参加された金子登美江さんから報告を聞くことができた。参加の目的として①女性や少女の平等・人権・エンパワーメントに関して学ぶこと、②脱原子力発電利用を訴えること③多くの方と交流することを掲げられた。

特に紹介したいこととしてSDGs(Sustainable Development Goals)持続可能な開発目標を挙げられた。2030年までの国際目標。地球上の誰一人として取り残さないという決意は代祷の「互いに尊敬する心を与え、ともにすべての人の幸いを求めさせてください」につながる。さらに、SDGsは自治体、企業、教育機関、NGOなどの他組織と教会の共通言語に成り得る。日本聖公会の積極的参加を進めたい。

テーマ別の話し合いは①SDGsについて ②女性の司祭が増し加わるために ③人権～あらゆる暴力・ハラスメント～について ④信徒の奉仕職の可能性について ⑤マルタとマリアのその後についてであった。各グループの報告を分かち合った。

閉会礼拝は聖餐式。司式：大岡左代子司祭、補式：井田泉司祭、分餐：中尾貢三子司祭。そして小林聡司祭は説教。イエスはマルタとの出会いと会話を通して、食卓の大切さ、食卓を整えることの大切さを心に留められた。この物語のすぐ後で、弟子たちに主の祈りを教え、日ごとの食卓を準備できるようにと祈りを教えられた。私たちはみ言葉の礼拝と食卓を大切にする聖餐式を行い続けている。そこにはマリアとマルタがそれぞれに大切なことを選び取った尊厳回復の物語があったことを記念し、心に留めたい。

## 第 4 回女性団体連絡協議会が開かれました

司祭 セシリア 大岡左代子（女性の課題に関する担当者）



去る 9 月 3 日(火)～4 日(水)、管区事務所会議室および牛込聖公会聖バルナバ教会ホールにおいて「第 4 回女性団体連絡協議会」を開催しました。この連絡協議会は「情報と課題の共有にむけてのネットワークづくり」のため、女性に関する課題の担当者(以下女性デスク)が呼びかけ人となり、日本聖公会に連なる女性の諸団体・グループ、女性の支援やエンパワーメントに関わっている団体・グループ(日本聖公会婦人会、日本聖公会 GFS、女性が教会を考える会、女性の教役者のネットワーク、KAPATIRAN、リグリマ、バンサーイターン共の会、NCC 女性委員会聖公会派遣委員、日本 YWCA、ACWCJ 聖公会委員、UN 派遣者のネットワーク、日本聖公会正義と平和委員会ジェンダープロジェクトなど)によって構成されるものです。2009 年に第 1 回が開催され、2015 年以降は総会のない年に開催されてきました。今回の参加者は 15 名。各団体・グループから活動報告を聞き、質疑応答を含めて情報を共有する機会を持ちました。日本聖公会婦人会からは役員会の改選時期と重なったために参加者が得られず、大変残念でした。また今回は特に「性暴力防止」

と国連「持続可能な開発目標(SDGs)」<sup>1</sup>をテーマとして、一日目にはフォトジャーナリストである大藪順子(おおやぶのぶこ)さんの公開講演会と写真展示を実施し、二日目にはSDGsの取り組みを中心に共に考える時間を持ちました。

公開講演会では、大藪順子さんが米国滞在中にレイプ被害をうけたご自身の経験を中心にお話くださいました。クリスチャンである大藪さんが被害を受けた後、何カ所も教会を回ったけれど残念ながら教会に自分の居場所はなかった、という話を聞き、決して他所事ではないと思いました。被害を受けた人は、自分は悪くない、悪いのは加害を行う人である、と頭ではわかっているけれども被害に遭った自分を受け入れられないことがあるが、その人がやがて〈わたし〉を生きていくためには「あなたは悪くない」と周囲が言い続け「がんばったね」と正しい言葉かけをすることが必要であること、そして日本には加害者に寛容な風土があるけれども「あんな夜道を歩いていたから」「あんな服装をしていたから」と被害者が責められるのではなく、どんな状況にあっても加害を行う人が悪い、という意識をこの社会全体で共有することが大切であることを再確認する機会となりました。講演会と同じ場に、大藪さんの撮影された「性暴力サバイバーたち」の写真が並べられていました。展示の方法にとっても悩んだのですが、「椅子」に立てかけられた一枚一枚の写真は、まるで彼女たち/彼らたちが一緒に会場にいるような効果を生み出し、「性暴力」についての思いをより深めることができました。PRが足りず、外部からの参加者が少なかったのは残念でしたが、これからも性暴力防止について考え発信し続けたいと思います。

二日目は、今年の3月に第63回国連女性の地位委員会(CSW63)に聖公会代表団の一人として参加された金子登美江さん(管区事務所総務主事・北関東教区)の報告を聞きました。特に、国連「持続可能な開発目標(SDGs)」は、アングリカン・コミュニオンAnglican Communionの宣教の5指標とつながっている、という指摘に参加者は目からウロコ。その後、カラー付箋の作業を通じて各団体の活動がSDGsの17のゴールとどのように関連しているかを確認し合い、今後の課題について意見交換を重ねることができました。SDGsは、主に行政や企業を中心に取り組みが始まっていて、最近では有名企業の社長や国会議員のジャケットの襟などにバッジが付けられているのをよく目にします。国連で決議されたものと聞くとわたしたちには縁遠いものと思いがちですが、17のゴールのそれぞれは、いのちの問題であり、社会正義の問題であり、人権の問題であることを思う時、まさに宣教課題と結びついているのではないかと、「誰一人取り残さない」



SDGsについて付箋での作業

<sup>1</sup> 持続可能な開発目標 SDGs(Sustainable Development Goals)は2015年9月の国連サミットで採択された2016年から2030年までの国際目標で、2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)より後継している。〈地球上の誰一人として取り残さない—Leave no one be hind〉を掲げ、17の目標と169のターゲットで構成され、世界の変容(Transforming our world)を求める活動。国や企業はもちろんのこと、個人の参画も促されている。

というフレーズは、イエスの福音と直結するものではないかと気づかされました。それぞれが活動の場に持ち帰り、SDGsについても広めていかれることを期待します。

この他、今改正が進められている『日本聖公会祈祷書』で用いられる〈ことば〉の問題や女性の聖職の課題などさまざまな分かち合いがあり、エンパワメントと連帯の機会となったことをとても嬉しく思います。この集まりのためにご協力いただいた各団体・グループのみなさま、管区事務所の職員の皆さまに心から感謝いたします。

(本稿は「日本聖公会管区事務所だより」第347号に執筆したものである。)

## 婦人伝道師シリーズ ⑥ 教会に献身し続けた横田清子

アグネス 北川規美子 (大阪教区)

「女、子ども」という言葉がありますが、教会でも子育て(日曜学校)や台所(聖卓)周りの働きは多くの女性(特に婦人伝道師や「牧師夫人」)たちによって担われてきました。中でも聖卓周りの仕事に関しては当然のように女性たちが担ってきており、そのことに関し疑問も持たれず、教会生活を支える働きであるという認識は低いようです。

今回紹介したい横田清子は教会刺繍を専門としていましたが、司祭であった夫が逝去した後に婦人伝道師となりました。そのため彼女の名前は教会の働き人として記録されており、幸いにも清子が担っていた教会刺繍という働きを、公会の大切なものとして思い返すことができます(「牧師夫人」であっても、どれほど熱心な信徒であっても、その働きが記録されることは希です)。

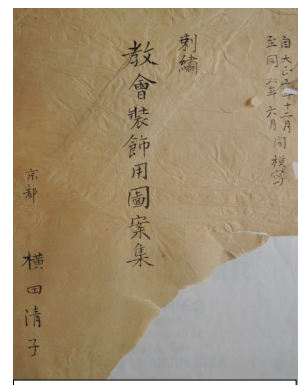


八木刺繍塾、1925年

清子は1889年函館生まれ、家族皆で上京し8歳で東京の香蘭女学校の初等科に入学、中等科を卒業した後ヒルダ刺繍部の助手となっています。20歳を過ぎて横田秋生師と結婚、執事、司祭である夫に伴って北東京地方部(現在は北関東教区)から京都地方部に移転しますが、1913年に秋生師が八木に派遣された際は「八木刺繍塾」を開校。また京都の聖ヨハネ教会に赴任している間には、おそらく英国

宣教師のクララ・ニーリー(婦人会や日曜学校、裁縫などの指導に当たる)が持っていた「教会刺繍図案集」(ニューヨークで発行)を書き写しています。

その後、秋生は武生(福井県)へ赴任し、後に「東京市社会局」に奉職、1923年に聖ルカ病院で逝去したことが「日曜叢誌」で伝えられています。清子は夫秋生が逝去した後ヒルダミッション構内に戻りますが、その当時、ミッション本部は東京の麻布から港区白金に移転しており、1919年晩秋からは英国のエピファニー修女会が構内に東京ホームを開所していました。シスターたちと同じ構内に過



「教会刺繍図案集」



ごしておよそ10年後、夫であった秋生の長兄に嫁ぎ大阪地方部であった現在の神戸教区に移動し、「牧師夫人」として教会の働きに献身していきます。彼女については徳島聖テモテ教会の「教会建築50年記念誌」にその働きが記されています（当冊子の記録に感謝）。

今の日本聖公会には婦人伝道師という職位はありませんが、その働きについても殆ど議論されることも検証されることもなく、いつの間にか消えてしまったという感があります。であるからこそ、わたしは時代の変化と共に女性たちが担った働きを検証し、今の時代の中でそれらの働きについて考えてみる必要があるのではないかと考えています。

## 大韓聖公会の女性の聖職者のリトリート

司祭 フィデス 金善姫（中部教区）



2021年には大韓聖公会女性の司祭按手20年を迎えます。

9月2日(月)～5日(木)、沖縄愛楽園でリトリートが行われました。毎週水曜日にお互いの召命と働きを覚えてお祈りすることとしました。10月10日(木)に後援会の発足式が行われました。「女性の聖職後援会」は女性の聖職候補生を養成し、性平等な教会、安全な共同体に向けて共に働き祈ります。(大韓聖公会の女性の聖職者は23名と1名の聖職候補生。その内1名は引退、4名は休職、2名は沖縄教区で勤務中)



嘉手納基地、糸数アブチラガマ、辺野古などを訪れ平和をお祈りしました。

## 女性デスクより

◆9月3日(火)～4日(水)、第4回女性団体連絡協議会が開催されました。各団体の活動を分かち合うとともにSDGsとの関連について理解を深めることができ、性暴力被害の防止への取り組みを進めるうえでも意義深い集まりとなりました。詳しい報告については本文中記事をご覧ください。

◆11月には各教区で教区会が行われます。日本聖公会宣教協議会(2012年)における提言「この世に仕える教会の形成のためには、様々な立場の人びとが、教会・教区・管区の意味決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性の比率が高まるよう

働きかけ、2022年までに少なくとも30%の参画を実現し、さらに青年層の参画も推進します。」に示された目標年2022年も近づいてまいりました。「2022年までに少なくとも30%を女性に」…もっと多くの女性の声を届けられるように意思決定機関に参画する女性の比率を高める、という目標の達成に向けて、選挙の前のアピールにご協力ください！

◆12月1日(日)17時より、東京教区聖アンデレ主教座聖堂にてささげられる「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」礼拝にぜひご出席ください(別紙ご案内)。また「16日間キャンペーン」期間中の代祷のお願いも同封しております。みなさまがお住いの地域の教会での礼拝や集まりの機会に、このキャンペーンのことをおぼえてお祈りくださいますようお願いいたします。



## ジェンダープロジェクトより



10月1週目、CCEA(東アジア聖公会協議会)がマレーシアのサバ州の州都コタキナバルで行われました。主教・司祭・青年・女性・信徒のうち、ジェンダープロジェクトのメンバーの下条知加子さんが女性、篠田が信徒として参加しました。日本・オーストラリアは管区としての参加、ミャンマー・マレーシア・フィリピン・香港・台湾・韓国は教区からの参加です。約150人が集まり、女性は主教の配偶者を含め約50人の参加でした。4年に一度の総会ということもあってか、カンタベリー大主教と配偶者のキャロラインさんも参加され、キャロラインさんからは、教会での女性の主体的な働きについてお話がありました。またグループ討議では、急遽「配偶者」のグループがつけられ、主教の配偶者として(予想もしていなかった立場に立たされることになったという思いの方が多く)期待される役割などをめぐり葛藤がこもごも語られたそうです。また来年のランベス会議でキャロラインさんは、主教の配偶者として女性、男性、そして独身の主教の集まりを考えておられるとのことでした。同性婚については、ウェルビー大主教は「自分は保守的な立場である」とのこと。参加の中には女性の司祭を認めていない管区もあり、多様な価値観に、自分自身がどう折り合いをつければいいのかを、ここでも考えさせられました。

### 女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもありますが、タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

### 正義と平和委員会

#### ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3~4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってください、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

### タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。